

青坂満

江差追分会師匠会会長
あおさか みつる



Mitsuru Aosaka



唄うことで、自分を慰める。 明日も、生きていける。

姥神大神宮渡御祭と江差追分

**浜風や波の音が染みつく
生まれも育ちも鷗島**

鷗島に立つと、さすがに風が強い。北前船でやってきた先人たちは、この風を受けて何を決意したのだろうか。「昔からタマ風が吹くと、漁師は恐れをなす」。江差追分の第一人者である青坂師匠は、まず風の話から始めた。タマ風とは、風速20メートルほどの勢いで吹く北西の風。羅針盤が指す北には魂が宿るといわれ、漁師たちはタマ風と呼んだ。一般的にはタバ風ともいう。「暗い海の水平線が白くなると、グワーツと、タマ風の音が聞こえてくるんだ」。その情感たつぷりの語り口は、まるで唄のようだ。

師匠の先祖は北前船で渡って来た能登の一族。代々鷗島に暮らす生粋の漁師である。「江差生まれの江差育ち、どこさへも出たことない」という師匠は、学校をさぼって浜辺でカレイやイワシに夢中になるような少年だった。浜風や波の音、潮の香りが体に染みついていく。追分を意識したのは、4歳のとき。毎年9月には、鷗島に祀られている弁天さんの祭りがあった。父親の漁師仲間が集まり、宴会で酔いがまわると